



# 皇国の守護者8

楽園の凶器

佐藤大輔

*Daisuke Sato*



立ち読み  
専用



IMPERIAL GUARDS Vol.8  
The Soldiers of Heaven  
by  
Daisuke SATO  
2004

口絵・挿画 平野耕太  
巻頭地図 根木儀雄  
編集協力 横山恵一  
加藤伸郎  
DTP ハンズ・ミケ



目次

剣虎兵学校教官としての新城直衛

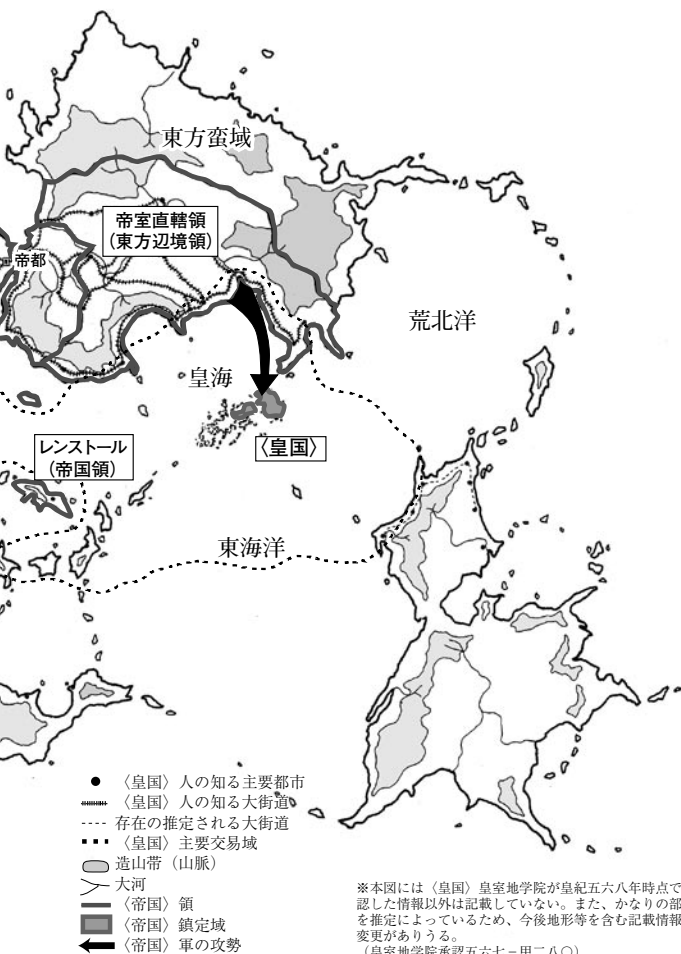
11

第一章 蹶起

21

第二章 逆賊と蕩児

117

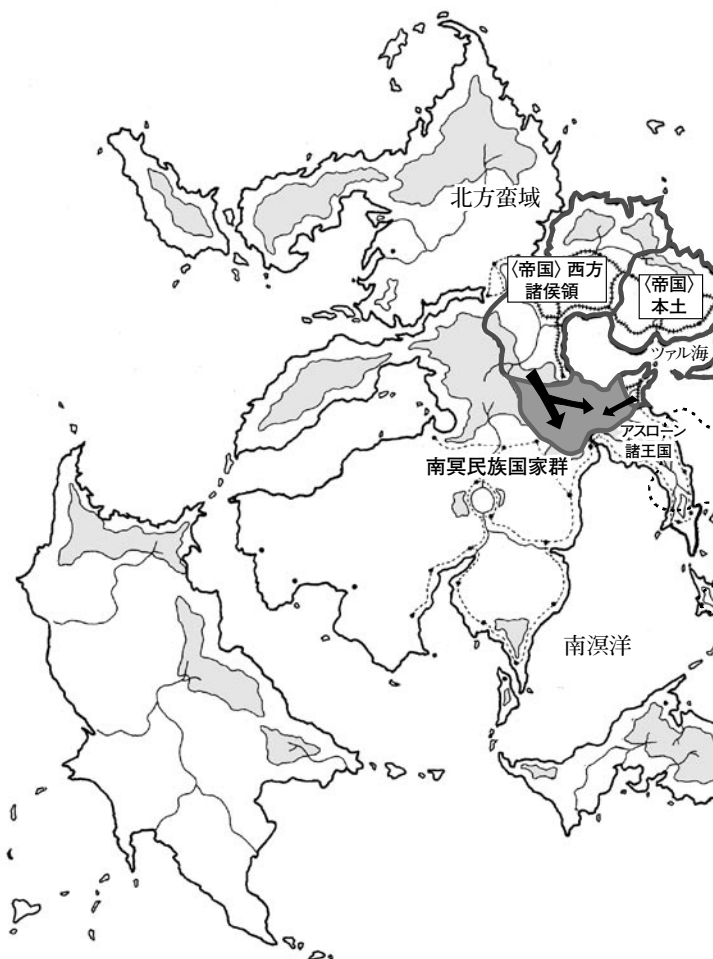


※本図には〈皇国〉皇室地学院が皇紀五六八年時点で承認した情報以外は記載していない。また、かなりの部分を推定によっているため、今後地形等を含む記載情報の変更がありうる。

(皇室地学院承認五六七-甲二八〇)

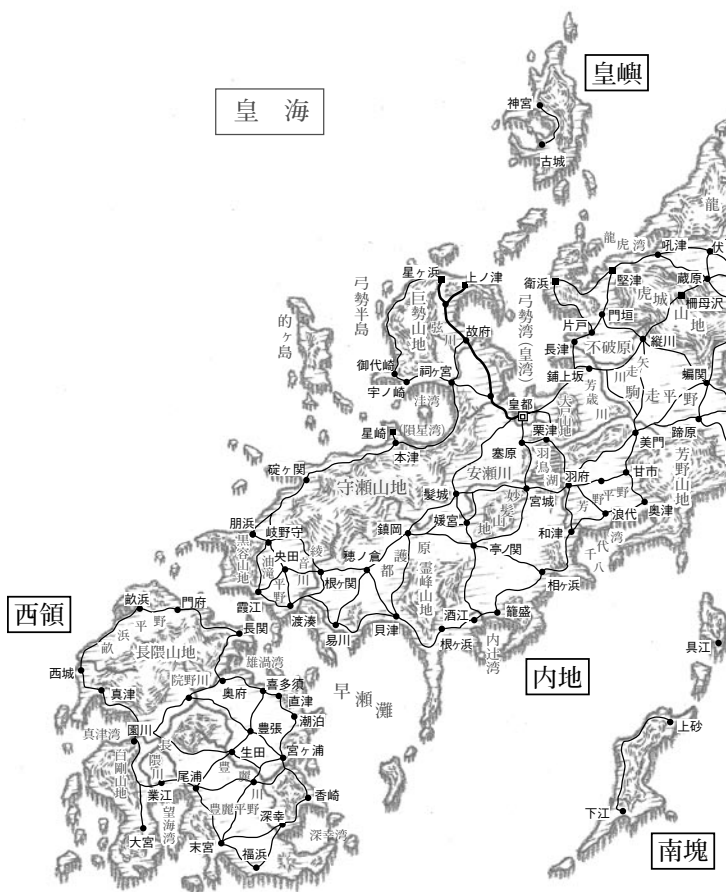
# 〈大協約〉世界：勢力図

(皇紀五六八年末)





〈皇国〉主要街道図（皇紀五六〇年代）



# 皇都改正略図

皇紀五八六年一三月現在

BaseMap Of The Imperial City 13.586.1.D.



(本図は皇室史学療法地誌提供の史料に基づいている)



皇国の守護者8

楽園の凶器



剣虎兵学校教官としての新城直衛



新城直衛なる異物が既存の体制にどのような価値を認めていたのか、同じ時代を生きた者たちのあいだでもその印象は大いに異なった。かつての斎仲正ですら及ばぬほどの奸賊であると断ずる者もあれば、あれはあれで皇室を尊んでいる、とそう気づいた自分の觀察力を疑いたくてたまらなくなっている者たちもいた。

実際にどうであつたか、その判断は難しい。新城直衛は皇室に毛ほどの価値を認めていないように振る舞つたこともあれば、史上名高い忠臣たちですら賞賛せざるをえないほどの行動をとつたこともあつた。

ただ、剣虎兵学校附であつた時期に示した態度からある程度の想像はできる。

当時の新城は遅い昇進をした中尉であつた。

実のところ、たかだか中尉で学校附とされることはきわめて稀、あるいは異常な配置と断じてもしつかえない。

軍の学校には素人を軍人に仕立て上げるもの、将兵に専門教育を施すもの、の二種類がある。

《皇国》陸軍の場合前者の最も知られたものは将校養成機関たる特志幼年学校になる（当時、兵の教育は各部隊に任されていた）。

後者は銃兵学校、龍火学校、剣虎兵学校等々の兵科教育機関が該当する（新城の時代、これらの学校には兵を各兵科下士官に養成する課程と、初級士官を各兵科将校に養成する課程の二つが併設されるようになっていた）。

前者の学生は《皇国》上流階級出身の少年たち

であり、後者の学生は部隊に二年ほど配置され、軍隊の現実に接した中尉たち、そして将校とは別の課程で教育される選抜された兵たちであった。

なお、〈皇国〉陸軍は将校教育機関の最高峰として一種の軍事総合教育を施す兵理帷幕院アームィーカワツジを持つていたが、この学生たちは各学校を卒業し、部隊指揮の経験を積んだ——少なくとも中隊長職を経た大尉や少佐の中から選ばれたものたちだった。

つまり専門職将校の養成機関としての軍学校における中尉の立場と言えば学生に他ならない。

しかし中尉でありながら新城は剣虎兵学校に学生として入校したわけではなかった。あくまでも学校附の将校として「配属」された。

なぜそのような形になったのか、真実を知るのは困難といつていい。かれが少尉時代に経験した匪賊討伐戦であげた戦果、あるいは一部将校が企んだ叛乱を告発したことが影響しているとおもわ

れるが、本人も周囲の者たちも、そのことについては詳しい記録を残していない（未遂に終わった叛乱そのものについては、一〇名ほどの有力将家出身若手将校が銃殺に処された記録がある）。

つまるところかれの学校附という扱いは、ほとぼりを冷まさせるという意味が多分にあったと想像するほかない。駒城家の後押しを受けていたとはいえ、すでに悪目立ちの過ぎるところが当時のかれにはあった。

とはいえ、剣虎兵学校での毎日は新城にとって決して不快なものではなかったようだ。

学校附というだけで別に仕事もなく、とりたてて責任があるわけではない。毎日を戦史や雑学の研究（というより書物の乱読）や友人たちとのつきあいで潰し、暇を見つけては愛猫千早と戯れていた。花街にも通った。当時、将校たる者は結婚を前提としない一般女性との交際を軍規でもって

禁止されていたから、別に不思議ではない（まあ、新城の場合は性癖の問題もあったが）。あるいはかれにとつて、生涯においてこれほど気楽な日々はなかったのかもしれない。

そうした日々が変化を見せたのは皇紀五六七年一〇月を過ぎたあたりであった。校長の命令により、補助教官職に任ぜられたのだった。

この任命について、彼の義兄格であった駒城保胤の意向が働いていたのは疑いが無い。当時の校長、殿井昭定大佐は軍監本部で保胤と机を隣り合わせたこともあったから、確実であろう。

新城が任されたのは主任教官が病いを得て休職した古戦史であった。軍人としての栄達を夢見るものが多い学生たちには人気があるとはとてもいえない教育分野だが、それは新城の責任ではないわだいいち、人気がなくても学生が出席しないわけではなかった。軍学校における講義は世間の学

校におけるそれとは異なる。あくまでも『軍務』の一環であり、軍制度上におけるその位置づけは泥まみれの野外教練、はたまた戦場で発せられる命令となんら違いがない。よつて、気に入らないから出席しない、などという個人の判断が通じるようなものではない。

ともかく、新城は教官の末席に連なつて中尉たちに古戦史を教えることになった。

当然、反発はあった。熟練した下士官が子供のような少尉に物を教えるのとは事情が違う。学生の中には新城よりも軍歴の長い者も大勢いた。

しかし、反発は一ヶ月ほどのうちに陽を浴びた水のように溶けていった。少尉任官以後、匪賊討伐ばかりさせられていたが故に、この中尉教官が誰よりも小部隊戦闘をこなしていることが知られるようになったからである。軍隊という組織では階級よりも経験が重視される傾向にあるが、その

中で最たるものが実戦経験なのだった。実際、この時期の（大規模内戦と対外戦争の端境期の）〈皇国〉陸軍において、新城を上回るほど戦慣れした若手将校を探すのは難しかった。かれはまた討伐の過程で正規の将兵と独断で臨時徴募した後備兵を集成した大隊規模の部隊を運用し、戦果をあげた経験もあったから、本来ならば中尉風情が知るはずもない立場から戦いを眺めることもできた。経験だけからいえば教官は適任であった。

ただし、かれの講義を受けた者たちが学生として抱いた感想は二つにわかれた。

ひとつは、純粹に影響を受けた、というもの。

もうひとつは、あれはやりすぎだ、という反応。両極端の反応がでた理由は新城自身の教授法（というほど本人は構えていなかっただろうが）にある。

新城は古戦史を既定の事実として伝えなかった。

昨日起きたこと、あるいは現在進行形の出来事のように語った。その過程において生じたあらゆる出来事を学生たちに疑わせ、さらに良い解決法があったのではないかと考えさせた。歴史の一種である戦史としてではなく、軍事的な事例研究として扱った。当時の教授法としてはかなり異例といえる。

それだけでなく、教材として取り上げた史実にも問題があった。

たとえばある講義でかれの舌鋒の矢面に立たされたのはだれだろう〈皇国〉の国祖帝、明英帝だった。

「明英大帝の軍が油洲へ進軍した時、軍が飢渴に苛まれたことがあった」

新城は学生たちに有名な史実を語った。〈皇国〉人ならばだれもが知っているといつてよい話だった。



軍勢が油洲に入った時、すでに糧秣は尽きかけ、水すら不足していた。

その時、兵の一人が自分たちと同様渇きに苦しんでいる明英帝に革袋から碗一杯の水を捧げた。

明英帝は受け取った碗をしばらく眺めた後、右の指先をわずかに浸し、両の目尻を湿らせると、残りの水を地に撒き、あと二〇哩進めば井戸があると全軍を励ました。

兵のために涙は流せても、喉を潤すことはできない——明英帝の偉大さが語られる際に必ず用いられる『油洲の捧涙』という神話じみた事績であった。

新城はその模様をまるでそこで見ていたかのようには語った。かれは人前でそれらしく語ることを嫌う男だったが、準備を整えていたためか語り口には実感がこもり、学生たちにちよつとした感動を抱かせたほどだった。

新城は学生の反応を確かめたあとでばたりと講義録を閉じた。なにごとかと注目した学生たちを無視するようにしばらく沈黙したあと、唐突に口を開き、

「これはまったく誤った行動だ」

と断定した。明英大帝の軍事指揮官としての才能、その限界を示していると告げたのだった。

「仮に諸君が戦地にあつたとする。そこで長駆進軍を命じられたにも関わらず、糧秣、水の手当が為されなかった場合、どのような感想を抱くか——そのような命令を下した上官を評価できるのか」

新城は静まりかえった教場を見回しながらいった。

「少なくとも僕は評価できない。糧秣や水の調達は兵站、補給という以前の、軍首脳部がなすべき最低限の配慮だ。軍の行動、そのすべてが御国の

ためになされるべきものであることを考えあわせるならば、絶対的な義務とすら断定してよろしい。よつて、その手当もつかぬまま軍を行動させるなど愚行以外の何物でもない。もし僕が戦地でそのような愚行を為す者を部下に持ったと仮定するならば——」

新城は背筋を伸ばした。

「上官として、かれを極刑でもつて断罪せざるをえない。指揮官とは兵と共に涙を流す立場ではない。兵に安心して汗を流せるだけの水を与えてやる立場なのだ。明英大帝はそれを理解しておられなかった」

そして、出来の良い冗談を口にしてるようにほがらかな態度で（なぜなら、表情は側溝の底を覗いたようであつたから）いつてのけた。

「よつてまことに畏れおおいことながら僕は確言するよりない。軍司令官としての明英大帝は疑う

余地もなく無能であられた、と」

教場にいた学生全員が凍りついた。無理もない。万民補弼令發布以前であれば即刻不敬の咎をもって軍籍剝奪、入牢を申しつけられかねない発言であつた。実際、その当時ですらそう受け取り、かれへ噛みついた者があつた。

「尊崇と軍事的現実への評価は異なる」新城は批判に応じ、ごく簡単な思考実験をもちだした。

「どうしてもというならば試してみてもいい。お互い、一個大隊を率いて五〇哩を行軍したうえで演習をおこなうのだ。こちらは水をたっぷり持つて。そちらは水無しで。有利なのはどちらだ」

批判者は黙り込んだ。

これが新城直衛だつた。

かれはまず状況を見極め、役割を認識し、必要とされる行動を取る人物だつた。必要と判断した場合、いかなる行動もためらわなかつた。教官と

してもそのようであつたし、野戦軍指揮官としてはそれ以上ですらあつた（六芒郭におけるユーリア・ロッシナ東方辺境領姫との戦闘では必ずしもそういう切れない部分はあるが）。おそらく、祖国や皇室に対する複雑な、鮮やかさをはねのけるような姿勢はそうしたすべてが影響を与え合つたあげくの現実的な帰結点だつたのだろう。これを要約するのはひどく難しい。新城という屈折を通り越した漢おとこの、余人にけして明かすことのない意志や気分が多量に含まれているからである。あるいはかれがこの講義の締めくくりに述べた言葉こそが、その説明に最もふさわしいかもしれない。自分の言葉がもたらしたざわめきが収まつた後でかれはいった。

「むろん、学生諸君が明英帝を国祖ノ帝として崇めることに僕はなんの意義も唱えない。人にはなにか無条件で信じられるものが要だ」

講義録を抱えた新城はひどく気楽な口調で続けた。

「しかしながら、それは戦いに直面した軍人が、指揮官としての責を負つた段階で頼るべきものではない。理由もなく信じられるものとはすなわち宗教にすぎない。そして宗教とは現実問題に容よう喩させるべきものでは絶対にない」

そして新城直衛は、かれの宗教観、いや人間観そのものを象徴するとおもわれる一言を告げ、講義を終えた。

「それができないのであれば軍人を辞めろ。坊主になれ。坊主になつて葬式でもして儲けるか気も頭も弱い薄ら莫迦どもを騙すかしていればいいのだ。本日の講義はこれで終わる。学生起立！」

そういうことであつた。まさにこの男の言葉というはかなかつた。なお、新城直衛の教官としての配置はごく短期間、独立搜索剣虎兵第一大隊

への配属を命ぜられる以前に終わっている。その理由については史料が残っており、現在でも兵部公文書館で閲覧が可能である。

『学生教育効果ノ大ナルヲ認ムモ、指導方法ニ甚ダシキ誤解ヲ招来セル要因ヲ含ム』

要するに、新城の毒気に当てられ、よからぬことを考えだす連中が軍に溢れては困るから教官はくびにする、ということだった。あからさまに言えば、傍迷惑な奴だ、ということになるだろう。

あるいは、これこそが新城直衛なる男に対するもつとも正当な評価なのかもしれない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF  
形式で、作成されています。この続きは  
書店にてお求めの上、お楽しみください。